

難病の子らに自然体験をプレゼントする

公益財団法人 そらぶちキッズキャンプ（滝川市）

「うわー、鳥になったみたい」グライダーの操縦席で目を輝かす男の子。「馬の背中って温っかい」裸馬にまたがってにっこりする女の子。「うおー、滑るすべる。止まらないよー」スノーチューブで雪の坂を滑り下る父と子。どの子どもの顔も生きる喜びにあふれ、広い草原や雪原いっぱいには笑い声がはずみ、はじける。これは難病を抱えて病と闘う子どもたちに、せめて外で遊ぶ楽しさと喜びを味わってもらおうと公益財団法人「そらぶちキッズキャンプ」が、滝川市郊外の丸下高原に開設した難病児のための自然体験施設でのプレキャンプの一コマ。小さい頃から発症した難病で、外遊びを一度も体験したことのない子どもたちが大半とあって、全員、時の経つのを忘れ、喜々としてはしゃぎ回り、その姿はまさしく万葉の時代からあった“遊びせんとして生れけむ 戯れせんとして生れけむ”（梁塵秘抄・四句神歌）をほうふつとさせる光景。キャンプ開設によって、滝川地域の人々にもボランティア参加の喜びや生きがい意識が着実に培われており、新しい医療のあり方や人と人の触れあい、地域づくりの方向に大きな一石を投じている。



「裸馬の背中ってあったかい」馬にまたがって満面の笑みを浮かべる子どもたち

■ 医師と造園業者のグループの思いがドッキング

そらぶちキッズキャンプは、小児がんなど難病で入院生活や家庭での治療を余儀なくされている子どもたちに、自然の中で遊ぶ楽しさ、喜びを体感してもらい、“心のケア”や“生きる力”を培ってもらおうと同時に、そうした子どもを抱える親に、ひと時の安らぎの時間を提供できたらの考えから、国内にあった二つの流れが一つとなって実現した。一つは難病の治療に当たる小児科医のグループ。もう一つは病院などにバリアフリーの公園づくりを進めている造園業

者のグループ。

現代表理事で聖路加国立病院小児科部長の細谷亮太氏ら、国内で難病児の治療に携わっている小児科医グループはかねて、小児科医は病院で病気を治療しているだけでいいのか、の疑問を持ち続けていた。同じころ、心を癒す公園づくり運動を展開していた現キャンプ理事の松本守さんや同じく東京農大園芸療法学教授の浅野房世さんら造園業のグループも、何らかの形で支援できないかと模索中だった。そんな折、それぞれアメリカにある、俳優・故・ポールニューマンさん創設の難病キャンプを視察、体験。そこで難病児がいきいきと過ごしている様子を目の当たりに見て「子どもたちの心をケアし、生きる力を与えるのはこれだ」と痛感して帰朝。同じ思いの二つがドッキングして国内に自然体験キャンプを創ることを決定、協力して設立活動に入った。2002年のことだった。

■ キッズキャンプ 滝川設立具体化

思いが熱かっただけに活動も活発。各自、人脈を頼って資金集めと土地探しに全国行脚。幸い趣旨に賛同して億単位で寄付してくれる企業や団体が数社見つかり、一方土地は、松本理事の出身地・滝川市が「そんな有意義な事業のためなら」と、市の観光レクリエーションゾーンとして開発していた江部乙・丸加高原の一角 16 畝を、20 年間無償で貸与してくれることで解決。ここ

は市街地から約 10 km の高原で丘あり、森あり、小川あり、草原ありの子どもがのびのび遊ぶ遊び場としては願ってもない自然ゾーン。さらに近くにグライダーやカヌーなどを楽しめる施設があり、農業や畜産が体験でき、雪もいっぱいというキャンプ開設にとっては最高の適地だった。

キャンプ計画では、既に集まった約 5 億円の予算で、2012 年までに管理業務棟をはじめ医療棟、宿泊棟、食堂、浴場を建設。その後、体育館やコテージなどを作る。案内所も兼ねた事務棟、医療棟は既に完成、スロープやサッカー場、森林散策道なども地元滝川市のボランティアの人たちの協力できあがり、2004 年以降のプレキャンプから使われている。

■ 子どもの歓声響く プレキャンプ開始

全面完成の 2012 年に先がけ、キャンプの PR と病気の子どもたちを一日も早く楽しませてあげたいと、実際に宿泊、体験する試験的なプレキャンプは 2004 年の夏、冬から開始。8 月の初回には、担当の小児科医や看護師さんらに付き添われた本州各地の難病の子約 40 人が無料招待された。治療中の子たちなので車いすに乗った女兒、杖を片手の小学児童、マスクをつけた男の子などさまざま。高原中央の市の宿泊施設に寝泊まりしながら、事務局スタッフらが用意したグライダー試乗、裸馬への乗馬、草原ゴロゴロ下りなど、それぞれの症状や

体力に合わせたプログラムを 3 日間の日程で体験。どの子どもどの顔も、自然の中での初体験の外遊びに目を輝かせ、ほおを紅潮させ、付き添いの医師も「この子はこんなに元気だったのか」とびっくりするほど。子どもたちは病気を忘れて遊び回るので、夜はさすがにぐっすり睡眠。その間、医師と看護師、スタッフは一堂に集まり、一人ひとりの体調を報告し合い、翌日の遊びメニューを決める。病の急変に備えて滝川市立病院とも連携を取り、付き添い医師全員が嘱託登録して万全を期す体制。子どもたちは親元を離れて遠い北海道での初体験だけに、はじめはみんなが緊張ぎみだったが、一、二日するうち全員の表情はやわらぎ、似たような境遇同士、すぐうち融け合って友達に。そんな様子をキャンプの事務局長代理の佐々木健一郎さん(34)は、「そらぶちは子どもに魔法をかける」と表現する。参加した子どもたちが、みんな両親やスタッフが驚くような笑顔と成長を見せるからだ。

送り出した親たちも、当初は不安で参加に二の足を踏む人が多かったが、見違えるように元気を取り戻して帰ってくる我が子にびっくり。一様に「参加させてよかった」との感想を寄せている。事後に行ったアンケート調査でも「楽しさは 200%以上」、「家族以外にこのような暖かい場所があるのはとても安心」など感謝の声がいっぱい。プレキャンプはその後も 2010 年まで毎年、夏冬に 2、3 回ずつ行われ、遊びメニ

ーもめん羊の親子とのふれ合い、夏まつりと露天、熱気球乗り、木馬やかんじき作りなどどんどん増加。とくに親同伴の冬は親子でそり滑りをしたり、かまくらを作り中で食事をしたりなど、病気でこれまで一度もすることのできなかった親子体験をし「今まで見たことのない笑顔が見られた」、「病院での歩行リハビリはいつも嫌がっていたのに、率先して自分で歩きそりに乗った。会話もたっぴりできずばらしかった」など嬉しい手紙が続々。中には初期のキャンプに参加した子どもが成長して「私も手伝いたい」とボランティアに参加するケースも出てスタッフを喜ばせている。



本州の子どもが大半とあってみんな雪遊びが大好き。雪まみれになってはしゃぐ子どもたち

■ 地元・滝川の市民意識も活性化

こうした活動が認められて、スタッフの責任者で元造園業の佐々木事務局長代理は 2010 年 9 月、日本青年会議所から「人間力大賞」の準グランプリに選ばれた。また北海道もキャンプ自体の意義を高く評価し

2008年暮れ、公益財団法人認定。一般がここに寄付すれば税が控除される組織となり、資金集めはかなり好転した。

一方、このキャンプ開設によって滝川市や同市民が手にした有形、無形の財産は計り知れない。施設建設、運営経費、交通費など直接的な経済効果もさることながら、それにも増して市民のまちづくりやボランティア、さらには生きがいとは何かの認識まで、半ば眠っていた市民意識が活性化したのが大きい。現在地元キャンプを支援する団体は市をはじめ文化、スポーツ、商工関連、農畜産、大学、慈善団体など40以上、人員にして数百人も。キャンプ開催時には自発的に集まってきて子ども世話や遊び相手、施設の手入れ、家畜の提供などに汗を流し「子どもたちがこんなに喜んでくれるなんて」と、“ひとの役に立つ喜び”を実感している。



キャンプ中央部に完成した事務棟と医療棟。緑いっぱい空気うまい

4人のスタッフと共にキャンプの留守を預かる佐々木事務局長代理は「地域の人たちの支援もあってキャンプは成功したものと思う。これからは地元のお年寄りや身障者の方々に働いてもらい、報酬を出すなどの形で地域の福祉向上にも役立ちたい。残念なのは道内の難病児の参加が少ないこと。これは医師や親の意識の問題と思われ、実践を通じて意義を知ってもらおうよう務めたい。今後はキャンプが永続するために、運営費がきちんと確保できる仕組みを作ることが課題。それには寄付文化やボランティア文化、医療福祉文化の向上が望まれる。それらが実現した暁には、道内外だけでなくアジアの難病児たちも招きたい」と初代・故横山清七会長、細谷代表理事共々、熱い夢を語っていた。

■ 連絡先

〒079-0461 滝川市江部乙町 4261-1 丸加高原

公益財団法人 そらぶちキッズキャンプ

事務局長代理 佐々木 健一郎

TEL : 0125-75-3200 / FAX : 0125-75-3211

Email : sasaki@solaputi.jp

URL : <http://www.solaputi.jp/>